

速記と日本語ワードプロセッサ

朝大和速記文書処理センター 津 田 弥 生

【速記者（話し言葉を扱う者）にとって望ましいワードプロセッサ】

速記者に限らず、あらゆるユーザーにとって同じことであると思うが、次のようなことが要請される。

1. 辞書が正しく、充実していること。
2. 文法処理、あるいは活用語処理が的確に行われること。
3. キーボードが使い易く、高速入力が可能なもの。

以上のような各項目について、私たちにとって望ましいワードプロセッサは、という観点から具体的に述べたい。

1. 辞書が正しく、充実していること

辞書は、ワープロにとって、最も基本的で大切なものである。処理プログラムやキーボードや機能がいかに優れていても、辞書がきちんと整理されていなければ、次のようなさまざまな問題点が出てくる。

(1) 辞書の正しさ

- ① 漢字の字体 (例) 螢→蛍 壺→瓶 螢光灯→蛍光灯
- ② 漢字のあてはめ (例) 中様突起→虫様突起 年令→年齢
- ③ 適切な漢字使用

漢字の使用は、普通の場合は、常用漢字に準拠するが、一つの熟語の中に常用漢字以外の漢字が混じっている場合に、全体をかなにしたリ、常用漢字にあってもかなにするほうが適切な場合がある。

(例) 馬鹿→ばか 手真似→手まね 通り掛かる→通りかかる

- ④ 送りがな、かな遣い (例) 次ぎ→次

ただ、複合語（動詞、名詞）の送りがなについては、許容の範囲が広く、それぞれに用い方が異なるので一概には言えないが、送り方が最長の「取り締まり、取り締まる」と最短の「取締り、取り締る」を共に収録しておくほうがよい。

(2) 辞書の充実とアイデア

① 外来語の収録

外来語は、もともとの日本語の単語と同音異義語になることはほとんどないため、国語辞典に載っている程度のものは「カタカナ」シフトキーを使わずに入力できれば能率的である。

(例) ページ グループ レントゲン テレビ ラジオ

② 接頭語、接尾語のついた言葉

これらをすべて辞書に入れることは不可能だが、日常よく使われる敬語や普通の名詞として使われるもの

(例) ご主人 お医者 お願い お祭 お茶 お金

③ 同音異字の頻度の高いもののツーストローク処理

同音異義語よりも、日本語の場合、特に同音異字の処理が必要。

1 回の変換キーで目的とする字を呼び出す工夫（共通できればよい）

（例）セイ→「性」「製」「制」、 ダイ→「大」「第」「台」「代」
 カイ→「回」「会」「階」、 ヒ →「非」「比」「費」「被」
 シツ→「室」「質」、 ジョウ→「条」「状」など。

④ 数詞の収録

(a) 不定数あるいは概数

（例）何枚 何回 何倍 何万 数人

(b) 単位 （例）番目 カ月 カ年 万円 億円

⑤ 本来は二つ以上の単語がつながったものであるが一語化したもの。

（例）ある日 ある程度 あり方 つけ方

⑥ 複合語

漢字二字以上の熟語がつながった複合語で、それぞれの熟語が比較的よく使われるものはよいが、一語的意識が強く、分けて入力すると面倒なもの。

（例）報告書 外科医 中高年

⑦ 各専門分野ごとの辞書づくり

メーカーによっては一部手がけられているが、早期の実現が望まれる。分野によっては、さらに細かく分ける必要もある。たとえば医学関係などでは基礎医学用語のほか、各科ごとの専門用語辞書が必要になるだろう。

（3）ユーザー登録

ユーザー登録の活用によって、入力のスピード化が図れるため、速記者にとっては、この機能の使い勝手がよく、自由な「読み入力」ができるもの、かつ登録エリアの広いものが望まれる。

速記者は速記符合の法則を応用し、語や句を系統立てて略語化してワープロを効率的に利用している。同じようなパターンでも、少しずつ違った言い回しをたくさん登録し、少しでも音声スピードに近づける入力方法を考えている。

(a) たとえば、頻度の高い「ひらがな」文字の言い回しについては

どういう どういうこと どういうもの どういうところ

どういうような どういうように どういうふうな どういうふうに

これらをすべて登録しようとする、かなりのユーザーエリアが必要になる。また、ブロックに区切られた一般辞書と同じところへ登録するやり方では、全体の登録可能語数が少々多くても、あるブロックではすぐパンクしてしまう。したがって、ユーザー登録のエリアは、少なくとも2万語以上、そして一般辞書とは別の場所にまとめて登録でき、入力時の検索は一般辞書に先行して行われること。

また、自由な「読み入力」で登録し、一般的な「読み」と重複しないように工夫しても登録できない場合が多い。「や・よ・ゆ・っ・あ・い・お・、・。」等々が頭に来る言葉の読みは日本語にはないため、メーカーが「こういうものの登録エリアは必要なし」と決めてかかるのも無理はないが、これらが自由に使えれば、拗音・促音のある一音節の熟語入力の一発

呼び出しを可能にする範囲が広がる。

(b) たとえば、頻度の高い同音異義語や言い回しの中に、特に拗音・促音を含む一音節をなすものは、話し言葉のスピードにより近づける入力をするには、略語化の単語登録が必要である。たとえば、

出発→しゅっぱつ→しゅっ(一音節)→「ゅは」

ちょっと→ちょっ(一音節)→「よと」

のような単語登録や、数字による単語登録ができないのは不便である。

(4) その他

辞書の表記(漢字の使用、送り仮名のつけ方)は、

- ・常用漢字にあっても、場合によっては使わない。
- ・専門用語においては、常用漢字にこだわらない。
- ・送り仮名のつけ方には、許容の幅がある。

したがって、「マイ辞書」が作り易い配慮が必要である。

2. 話し言葉についての文法的処理の組み入れ

現在、メーカーが用意しているワープロ辞書には、ほとんど言ってよいほど、話し言葉の言い回しの文法解析がなされていない。わずかに「～てる(～でる)」くらいが漢字に変換される程度である。

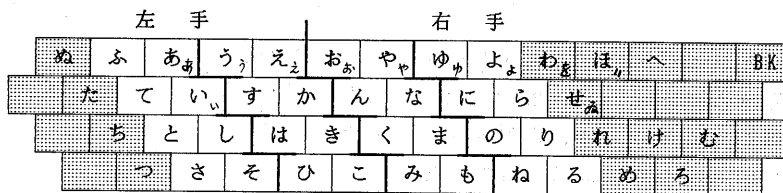
書き言葉	話し言葉
助詞「て(で)」+「いる」	「てる(でる)」
知 <u>っ</u> ている 読 <u>ん</u> でいる	知 <u>っ</u> てる 読 <u>ん</u> でる
助詞「て(で)」+「いく」	「てく(でく)」
逃 <u>げ</u> ていく 運 <u>ん</u> でいく	逃 <u>げ</u> てく 運 <u>ん</u> でく
助詞「て(で)」+「おる」	「とる(どる)」
言 <u>っ</u> ておる 飲 <u>ん</u> でおる	言 <u>っ</u> とる 飲 <u>ん</u> どる
助詞「て(で)」+「おく」	「とく(どく)」
任 <u>せ</u> ておく 頼 <u>ん</u> でおく	任 <u>せ</u> とく 頼 <u>ん</u> どく
活用のある語の連用形+助詞「は」	「や」「ゃ」
聞 <u>き</u> は 返 <u>し</u> は 呼 <u>ん</u> では	聞 <u>き</u> や 返 <u>し</u> や 呼 <u>ん</u> じゃ
活用のある語の仮定形+助詞「ば」	「ゃ」「や」
行 <u>け</u> ば 言 <u>え</u> ば	行 <u>き</u> や/いいのに 言 <u>や</u>
活用形のある連用形+助詞「ては(では)」	「ちゃ」「じゃ」
歩 <u>い</u> では 急 <u>い</u> では	歩 <u>い</u> ちゃ 急 <u>い</u> じゃ
助詞「て(で)」+補助動詞「しまう」	「ちゃう(じゃう)」
返 <u>し</u> て <u>しま</u> う 運 <u>ん</u> で <u>しま</u> う 使 <u>っ</u> て <u>しま</u> った	返 <u>し</u> ち <u>やう</u> 運 <u>ん</u> じ <u>やう</u> 使 <u>っ</u> ち <u>やう</u> た

上の表に示したものは、文法解析が可能であると思われる。

3. キーボードが使い易く、高速入力可能なこと

(1) J I S キーボードについて

J I S キーボードができるまでには、それなりの歴史があったのだろうが、少なくとも文書作成機として登場した現在の日本語ワードプロセッサの入力キーには適していない。



オペレートする立場から言えば、右手小指の守備範囲が、最も打ちにくい最上段（第4段）で5キーもあり、右手のホームポジションが乱れやすい。

また、バックキーの位置にいたっては、オペレーターは絶対にミスタッチをしないという前提でこの位置が選ばれているように思う。従来のタイプライターの場合は、ミスタッチの修正がむずかしいが、ワードプロセッサの場合、誰でも、使って便利な機械、また簡単に入力ミスの訂正、文章修正が可能であるため、バックキーの利用頻度は高い。もう少し使いやすい位置への変更が望まれる。

また、日本語では頻度の高い助詞の「を」、拗音「ゃ・ゅ・ょ」、促音「っ」、句読点「。・、」等の入力にシフトキーを必要としたり、濁音、半濁音でも重ね打ちしなければならない、一打入力ができない。この辺の改良が必要である。

もう一つ、J I S キーボードの文字配列は、日本語を入力するには、音節の頻度に合わせたキー配列になっていないため、指の運動機能にも合わない。J I S キーボードであっても、熟練でカバーし高速入力する者もいるが、初心者にとっては非常に入りにくい。

それからキーボードの形状、これはどのメーカーのワープロにも言えることであるが、もう少し人間工学的な配慮がほしい。NECからパソコンPC8801につけられた漢字入力キーボードの形状は非常に興味深い。

(2) PC8801の「森田式」入力キーボード

このキーボードについては、たった1週間のテスト結果であるため、私の独断と偏見で少し述べてみたい。

この「森田式入力方法」は、子音と母音を左右に振り分けてあり、ほとんどが左右交互打ちになっているため、両手の動きがなめらかで入力速度を上げることができる。

「ハの字型」のボードは上4段目のキーも案外打ちやすかった。

難点を言えば、左右両手がやや離れすぎている。上の方で8.5センチ、下の方で12センチ両手が離れており、その間にファンクションキーを置いてあるが、上で3.5センチ、下で8センチくらいの両手の離れ方の方がよいように思う。また、両手の間にあるファンクションキーは、人差指の守備範囲キーをもう一つ増やして解決した方がよいと思う。

いずれにしても、専門家向きを狙っていると思うが、漢字の音読み「2音」の

発音に合ったキー「an」「ai」とか「ou」「uu」等を備えているため、漢字2音のものを入力する場合にはスピードを発揮する。

「ひらがな」部分の入力については、この漢音用のキーが使えないため、ひらがな文字入力のスピードが落ちる。また、漢字用とかな用の母音「あいうえお」が異なるキーであるのが、スピードを上げるための障害となっている。

さらに、最近の日本語文の漢字・ひらがなの割合が、大体3:7くらいである点からも、いまひとつ「ひらがな」文の入力方法の改善が望まれる。

(3) ツーストローク入力方式

万年筆、ボールペン、鉛筆代わりに利用するワープロという観点から、私の場合、ツーストローク式のものは省いた。よく、入力専門じゃないか、なぜツーストロークに挑戦しないのかというご忠告も受けるが、今後とも、積極的に使っていく気持ちはない。

あらゆる分野で活躍されている方の話し言葉を、黒子に徹して整理していく職業であるため、JIS第2水準までの言葉は一通り知っていなければならない、とうてい第1水準だけのツーストロークでは、人の話し言葉を処理しきれるものではない。最終段階まで原稿を仕上げて初めて内容の理解もでき、速記者としての職業も成り立つのであり、手書きならば知っている文字を、4桁コードを繰って追加入力するような作業は避けたい。

また、録音テープを開き打ちするため、その内容を1文節ずつ記憶して打ち進むため、ツーストローク方式では思考のさまたげになる恐れがある。

ただし、システム化された印刷会社における単なる入力専門のオペレートのためならば高スピード、高生産性で歓迎されるかもしれないが、技術習得期間が長すぎる。当社のような中小企業で採用した場合には、オペレーターの養成機関で終わってしまう危険性もあり、僅かの賃金差で労働力の流動が考えられ、経営コスト的にも合わない。

(4) 親指シフト

最後に、「神田方式」の親指シフトについて述べてみたい。日常、重宝に使いこなしている機械であるため、いくらか身びいきな点があるかもしれないが、その点はお許しいただきたい。

私どもが、かな漢字変換方式のものの中から親指シフトに機種をしばったのは、速記者のための利用方法を優先したためである。話し言葉（音声）を録音テープから、または速記符号から、その内容を理解して、日本語文に直し入力するのに一番抵抗感が少なかったからである。濁音、拗音、促音、句読点が、いずれもワンタッチで入力できるのは大変な魅力であった。

ただ、親指シフトが絶対的なものと評価してではない。選んでいって最後に残ったのが親指シフトだったわけで、このキー配列では外来語の「カタカナ文字」が入力しにくく、「ひらがな」文字入力と比べると、入力速度が極端に落ちる。また、半濁音の打ちにくさには日々泣かされ、単語登録機能を応用して、使う側からの改善改良を相当に加えていっている。機能的にも、単語登録が容易であったことも幸いだった。

さらに、「挿入」に「挿入」を重ねることが何回も容易にでき、なおかつ、そ

の途中に「削除」「削除」を重ねていくのも自由であるのは、話し言葉を何度も推敲してまとめていく速記者にとって、使い勝手がよかった。

【当社におけるワードプロセッサの利用実態】

話し言葉の内容を十分に理解しなければ、速記者はよい原稿の作成はできない。私たちがもし話し言葉に出てくる「やっぱり」「えー、まあ」「ですね」といった無駄な言葉をそのまま文字にすれば、「なんて下手な速記者なんだ」と必ずお叱りを受ける。話し言葉の饒舌な部分、余分な言葉のカット、修正を加え、言い間違った熟語を正して、初めて「当たり前」の原稿として受け取っていただける。決してお褒めの言葉はいただけない。

また、速記者が話し言葉の流れや雰囲気を変えず、きれいに原稿をまとめて提出すると、それを読まれた方のほとんどが「あの時、自分はあがってしまったが、案外うまくしゃべれていた」と安心される。それが自分の話し言葉そっくりだったと思いこまれる方が100人中99人。そう思いこまれる原稿ができて初めて一人前の速記者なのである。

それでは、「かな漢字変換方式の親指シフト」を採用して、まる3年間の当社の経過と結果報告をすると、

(1) 入力トレーニング。

ブライド・タッチができるまで2週間の練習

毎日2～3時間の練習で1分間 100タッチ、ミス・タッチ10%以下
(練習フロップイが親切に、おもしろくできていて大いに助かった)

(2) 自主トレーニング1週間。

2週間を経過して、(1)のレベルに到達してから簡単な文書入力を1日間のみ約3時間程度教育し、初めてメーカー作成のマニュアルを与え、ここから自主トレーニングに入り。機能面はできるだけ独力でマスターさせる。

(3) 録音テープ聞き打ち。

(この時点で一人1枚の辞書フロップイを貸与。「マイ辞書」の作成)
1分間 120字程度の簡単な話し言葉の録音テープを与え、ディクテーション・マシンでフットペダルを使いながら入力する練習に入る。(初めはキー操作のための指と、録音テープ聞き取りのフットペダルの足と、画面の文字確認・話し言葉の理解までを同時にするのに戸惑うが、約2週間で簡単な録音テープ聞き打ちができるようになる)

(4) スピード入力練習。

速記符合の略語化の法則を利用すると同時に、音声聞き打ちということから、音を第1に考えて単語登録をし、その言葉の入った録音テープを繰り返し聞き打ち(10回くらいで十分)して覚えていく。

(例) 私→わたくし→わ 私は→わたくしは→わは

ところ→ろ ところが→ろが

代表→だいひょう→だひ 情報→じょうほう→じほ

第1→だ1 第2→だ2 (1)→か1 ①→ま2

ありません→あせ おりません→おせ

以上の方法で、現在早い者で10分間180字から200字くらいまで、日常

業務の定例議会の議事録作成などでは高スピードを出している。これは定型的な文章が多く、単語登録処理ができていたためであるが、初見の原稿などで新聞社あたりのテスト（朝日・読売）を受けた場合には、1分間100字から120字程度である。

取材速記から反訳原稿提出までの生産性の向上は、従来の手書きに比べ約40%アップ。手書きで原稿用紙のマス目に丁寧に書くには、普通1分間30字から早い人で40字。字数のみで比較すると400%～500%の向上である。取材・反訳入力・調査・校閲・校正・原稿届けまでのトータルでは約50%～60%の向上である。

生産分野で10%の合理化をするのは大変なことであるが、私たちも知的生産分野に働く者として、現在の数字に十分満足している。

また、一般的なかかな漢字変換式のワードプロセッサの導入により、今後、技術者の補給が自社内教育に頼らずにすむ可能性があること、自社内教育をするにしても、短期間養成が可能なこと等から、今後とも「かな漢字変換方式」でいくつもりである。

☆ワードプロセッサと電算写植機

1年間で30台のワープロを導入、3年間で61台、一人1台の目標を達成。1日1台の平均稼働時間4時間。入力文字数一人2万5000字平均。難聴録音テープも多く、ヒヤリングの方に時間がとられる。

大量の文字数を高スピードで処理していくうち、いろいろな思いつきを試みる事ができた。その一つが電算写植機との連動である。県市町村議会の議事録作成には、速記のために文字入力されたフロップイの再利用により、電算写植出力して版下まで一気につくる事ができ、通常印刷業者が1カ月かかる5～600ページの議事録を、5日から7日で作ることができるようになった。

また、ワープロ7台（うち1台は予備）でシフトを組み、会議の翌朝に、前日の午前9時から午後5時までの完全速記録を1000部つくって販売（同盟大会で過去3年間の実績）することでもできた。

こうしたことは、従来の手書き文字による速記反訳作業では考えられなかったことである。一般にまだ速報ニーズは少ないが、知らないための需要不足もあると思う。たとえ高価格であっても、必ず「いますぐ必要な文書入力」「速記録作成」の必要性が生まれてくると思う。そのときに備え、これからも超スピード入力、高品質出力にチャレンジし、新しいマーケットの創造・創出をしたい。

当社は、電算写植機導入に当たっても専門オペレーターは採用せず、ワープロを熟知した者の側から、電算写植機との効率的なコンバートを考えていくという頑固な方針で、歩みは遅いが、一つ一つ制御記号などの互換性をつけていっている。まだ5カ月足らずだが、かなりの成果が上がっている。ワープロのフロップイからノーファンクションで電算写植出力も、間もなく夢でなくなるだろうし、やがては人の話し言葉と同スピードで文字入力できる〔ワープロ〕＋〔キーボード〕が開発されてくるのではないだろうか。

【待たれる辞書の統一・新JISキーボードとフロップイの互換性】

続々開発されるであろう各種 O A 機器、ニューメディア等々への入力、パターン認識、音声入力などが今後実用化されていくであろうが、日本語の特殊性から、その確実性と速さにおいて、文書処理にはキー入力のほうが優位を保つと思う。ビジネスマンにとっても、日本語が書けると同じように、キー操作ができることが入社条件の一つになる時代が、やがてくるのではないだろうか。

そのためにも、一日も早く日本語入力が効率的にできる全国的統一の新 J I S キーボードが待たれてならない。

また、各機種間の互換性は、言われて久しいが、本音と建前の違いなのか、メーカーの開発姿勢の中に、一步でも歩を進めた話しも聞かないし、監督官庁の具体的な行政指導も聞かれない。O A 機器の進歩開発が、ユーザーの犠牲のもとに進められるのは残念である。

さらに、辞書フロピイの内容である。特に送りがないにおいては、各メーカーともまちまち、小中高校の学校教育で教えられたものを否定するような内容の辞書も多い。せめて辞書の内容くらいは、国民共通の財産として、よりよいものを政府・メーカー・ユーザーの協力のもとにつくってほしい。

やがて、現在、だれでもが電卓を叩けるように（といってもメモリーまで使いこなしてはいない）、報告書、企画書等は、迅速に自分で処理する時代がやってくるだろう。

そのためにも、内容充実した正しい辞書、全国統一の使い易い新 J I S キーボード、各機種間での互換性を持ち、安心して学校教育で取り上げられるものが、開発されることを期待してやまない。

以上